多職種で考える　今後の内視鏡室

内視鏡に関わる全てのスタッフ教育

◎今村 倫敦[1)]
東京品川病院[1)]

＜背景＞昨今、医師と看護師だけでなく、臨床工学技士や臨床検査技師が内視鏡室運営に参入する病院が増えてきている。当初は病棟看護師人数の確保など、消極的な理由が見られたが、近年では機器に詳しい工学技士、検体に詳しい検査技師を入れてほしい、という積極的な理由から内視鏡室に多職種が絡む施設が増えてきている。当院でも、臨床検査技師と看護師・看護助手が協力して内視鏡運営を行っている。＜目的＞多職種で行う内視鏡室運営と、その教育体制について紹介する。＜多職種で運営する際のポイントと教育体制＞多職種で運営する場合、それぞれの職種が別々の上司を持つ場合が多い。その場合、内視鏡室内での責任の所在が不明確になり、「内視鏡室」という組織が不明確になってしまう。当院は、内視鏡責任者として臨床検査技師主任が立ち、看護師含めて勤怠を管理し、内視鏡室内で発生したトラブル等に対し責任を持つ形で組織されている。こうすることで内視鏡スタッフのワンマン・ワンボスが成り立ち、職種間の見えざる壁が解消される。また、職種に応じて業務を細分化することなく、国家資格の許す範囲でほぼ同じ業務を行っている。その上で、特に内視鏡業務に特化していくスタッフに関してはより専門的な治療内視鏡介助を、検査技師として生理機能検査業務や看護師として外来業務など、業務のローテーションを組んでいるスタッフに関してはルーチン検査の介助を中心に行ってもらっている。内視鏡関連知識を統一するために、定期的にそれぞれの職種の得意分野を他職種に教育する勉強会を開催している。洗浄業務を任せている看護助手にも、物品の知識や洗浄消毒に関しての勉強会を行ったり、スタッフと共に内視鏡修理工場への見学に行ったりと、内視鏡業務に興味を持つとともに専門知識を獲得することによる修理削減に取り組んでもらっている。＜今後の展望＞内視鏡室がより発展しスタッフが増えた場合、組織の統制はもっと難しくなる。職種を限定しない、内視鏡スタッフとしての共通した教育体制をしっかりと整備し、レベルを底上げしていきたい。また、内視鏡専属スタッフには独自の給与体制を敷くなど、病院全体への認識も高めていきたい。

＜連絡先：東京品川病院　TEL：03-3764-0511＞